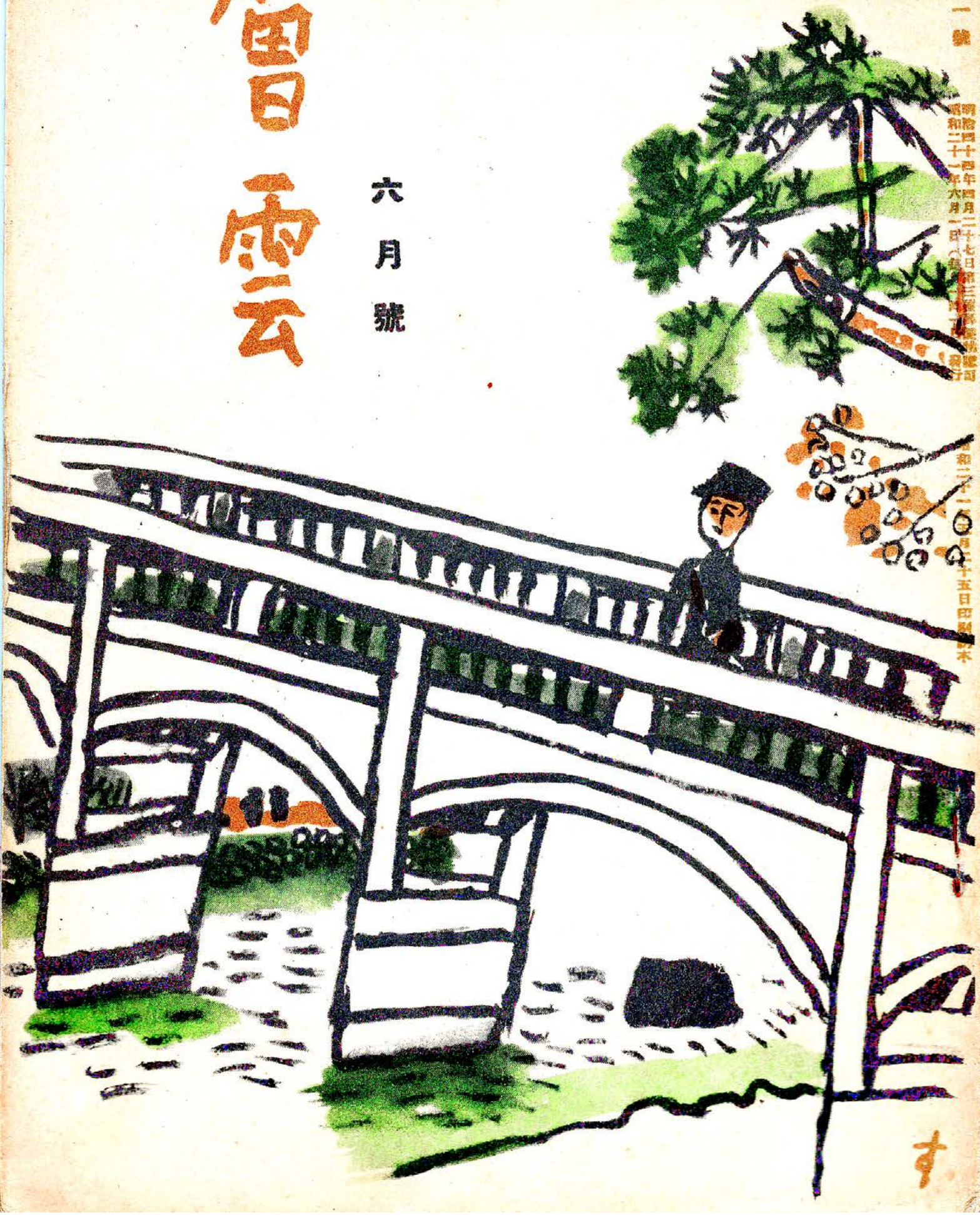
層雲

六月號

第三十四卷　第一號
明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可
昭和二十一年六月一日（毎月一回）発行
昭和二十一年六月十五日印刷納本



層雲

第三十四卷　第一號

有隣亭藏書

層雲

天地を暗くして豪雨の降つた後、孫に雷鳴さへとどろしく荒れた上に、それがカラリと霽れわたつた時、水のやうに澄んだ空に、遠く連る山の上に、大きな白い魚のやうに、ふうはりと泳ぎ出る雲を見るであらう。人々は、おゝ、もう大荒も濟んで、天氣がきまつたなと思ふ氣持で、その雲をいかにも晴れ〴〵と眺めるであらう。さうだ、我々の展望に一脈の、まことに爽やかな感じを流すもの、それが此の「層雲」と呼ばれる雲なのである。

―井泉水―

再建最初のページに

荻原井泉水

我等の「層雲」がこゝに復活した。――昭和十九年五月、戰爭情勢の急迫と共に、官憲の統制命令に依つて死命を制せられたものが、戰爭の終局と共におもむろに生きの命を取戻し、こゝに、昭和廿一年五月、再び「層雲」といふタイトルを以て、再建第一號――卷數は、創刊以來の卷を引き嗣いで、第三十四卷第一號とする。――を刊行し得たことは、諸君と共に、私の大きな喜びである。

層雲第一卷第一號の卷頭には題して「自由」(ルマン・バアル)といふ一文が載つてゐる。自由こそは層雲の道の發祥以來のモットーである。その當時には未だ「自由律」といふ稱呼は用ひられてゐなかつたが、抑も俳句は文學でなければならず、文學は人間であり、人間は自由でなければならぬといふことを主唱してゐた層雲として、その俳句がやがて自由律を標榜するに至つたことは當然の成り行きである。しかも、此の戰爭の中期から、自由といふ言葉はじり〳〵と壓害を受けて、「自由律」といふ名稱を用ふることが許されないといふ情勢となつた爲に――今から思ふと莫迦々々しいことだが――「內在律」といふ名稱を代用せしめなければならぬ次第だつたが、今日、一天雲晴れて、再び自由といふ言葉が許されたばかりか、誰も彼も、今まで自由など口にしたことのない輩までも、自由を謳歌する時代になつたことは、私から見ると、拍子抜けしたやうな感じもするが、とにかく喜ばしいことに違ひなく、さうした時代に至つて、層雲が大空を泳ぐ雲の如くのび〳〵と展開するといふことは自然の現象と云ふべきである。

私は、戰爭の最中に、所謂「戰爭俳句」を作らなかつた。又層雲の選に當つても必勝信念風の句を好まなかつた。勿論、戰爭を始めた以上は、日本國民として、負けてはならぬとは思つてゐたが、何としても勝算の無いことは解りきつてゐたから、お題目のやうに合言葉のやうに「日本は勝つ」などと云ひ放つて獨り肩を張つたやうな句はどうも空々しい氣がしてならなかつた。そして、そんな安穩

な、神がゝり的な概念に陶酔してゐては反對に負けるぞ、とさへ感じてゐたのである。本土の空襲がひんぱんとなり、私の東京の家も燃かれ、鎌倉の假寓も危く、日に夜に爆彈の恐怖にさらされるやうになつては、毎日の生活が戰爭の中にあるので、しぜんと戰爭意識が句として作られざるを得ない譯だが、其中にあつても、私は敵と味方といふ考を越えて、其上にある至高なる神の心とも云ふべきものを、此の激しい人間我執の形相の彼方に感じたい、それが俳句ではないかと思つてゐたのである。一方には、戰爭の成行が逼迫してくるに從つて、人間の心はだん〳〵うるほひといふものを涸らして行つた。何でも勝ちさへすればいゝといふ戰爭心理は、何でも自分さへ好ければいゝといふ心理とも通し合つて、人の心のまことといふことが日に日に失はれて行つた。これは日本として一大事であると私は思つた。たとへ、彈丸の戰爭に勝つたとても、道義に於て敗れて、何の日本の誇りがあらうかと思つた。日清戰爭の時、私達は子供の口で「邪はそれ正に勝ちがたく、直は曲にぞ勝栗の……」とうたつたものである。神は毎も窮極に於てまことの方に軍扇をあげるのだ。戰爭の動機に於て、何れが正か邪かといふことを今更論ずるのではないが、我々は日々平常の生活に於て、「まこと」を失つてはならない。此際、行住坐臥の氣持に於てやゝもすれば見失ひがちなる「まこと」といふものを護持することこそ、俳句の大きな使命ではないかと、思つたのである。「俳句研究」二十年一月號の卷頭に於て、私は次のやうに書いた。——

○まこと

戰爭は凡ての物の平時的の價値を轉置せしめる。金よりも銀が貴いものになり、銀よりも銅が貴くなつたりする。文藝批判の標準さへも顚倒する。美は力の下位に就き、個性は國策の上には認められない。戰爭はまた、樣々の物を惜しみなく捨てさせる。物のみではない、時には愛をも、人情をも——だが、捨てよ〳〵の掛聲に乘つて、うつかり捨てゝはならぬものがある。それは、人の心の「まこと」である。

戰爭は凡ての物を驅使する通りに文藝をも驅使する。戰爭指導の示標に從つて、文藝は役勞せねばならない。俳句とても當然さうである。然し、俳句は俳句として、上から斯うせよと命じられなくとも、俳句の本分に於て、俳句の性格に於て、自ら進んで此の重大なる時に爲すべき重要なる業能があるのではあるまいか。それが、人の心の「まこと」を護るといふことではないか。物事は理論的に行動するよりも、良心と本能とが一さう適切に指導する。俳人が俳句を作る時の良心と本能とは、人の心の「まこと」即ち「眞實」の追求であり、其表現は「まこと」其もの、即ち眞言(まこと)である。俳句の道は「まこと」であると提唱した芭蕉以來、此の「まこと」を俳句の精神とする限り、此の戰爭の下に於ても

俳句が俳句として行く道は嶮乎として明らかである。

我が大君の醜の御楯とならう、その忠誠の心も、生産勤勞にいそしむ、その挺身の心も、他から命ぜられたものではなく、自ら發したる眞心であることは、つまり「まこと」から發するといふことである。「まこと」こそ人の心の鹽である。文藝は心の糧だといふ。その糧が戰時的に改變せられることは止むを得ないが、糧として其中に鹽を缺いてはならない如く、其量から云へば實にささやかな存在であらうとも、俳句こそは、鹽としての本分を生かさなくてはならないのである。

私は戰爭のさ中に於て正しい俳句の道を守り、俳句の本分を盡したいと考へた。政府當局は、俳句に「戰意昂揚」を命令した。だが私はむしろ「まこと昂揚」を提唱したのだ。それは、決して戰意を昂揚するなといふのではないが、もう一つ上の氣持、——或はもう一つ奥の氣持——であつて、戰つてゐる日本國民の根本の心構へとしてゞある、此の根本の心構を忽るがしては戰爭も何も出來ないからだと考へたのである。

今日、戰爭は終つた。日本として痛ましい敗北に終つた。これは日本が神の前に「まこと」を裏切つてゐたからではないか。爲政者や軍部が國民を「うそ」でごまかしてゐた爲ではないか。しかも戰爭の進行と共に日本人が日に日に「まこと」の心を失つて行つたからではないか。然らば、再建日本として如何なる態度に出なければならぬかといふことは、云ふまでもなく、「まこと」の心の日本として立ち直ること、その以外にはないのである。

戰爭をしてゐる時も一番肝腎なものは「まこと」であつた。戰爭が濟んで、更に一番大切なものは、やはり「まこと」である。芭蕉以來、「まこと」を道とする俳句は、其故に、戰爭中も其の重要なる業能があり、戰爭が濟んだら、一さう其の業能が大きいのである。戰爭に即應したる俳句は、芭蕉の言葉になぞらへて云へば「流行」の一種であつた。戰爭を離れての俳句は「不易」の境地に歸つたものである。

さて、此の「まこと」といふものを改めて考へて見よう。第一に「まこと」とは己を僞らないことだ、己れが本當だと感じたことを曲げないことだ。だが、苟も本當だと感じた事が果して眞實かと、もう一つ深く掘つて究める氣持が必要だ。即ち「まこと」とは「まことを深める」といふ心なのである。第二に、その「まこと」といふものを世間のお付き合ひ的に濁さないことが肝要だ、世間といふものには由來、因襲、習慣といふものが根强くある爲に、「まこと」がまことしやかに歪められ易い。さうした歪みを警戒しなくてはならない。即ち「まこと」とは「まことを正す」といふ心なのである。世間の因襲や習慣はなか〳〵大きな力をもつてゐる。時には上から押へてかゝる勢ともなる。上から束縛されてゐるとは意識しなくと

も、其實は知らず〳〵束縛を受けて其に甘んじてゐることが多い、これは無意識ながら「まこと」を歪めてゐるのだ。此事をはつきり意識して、その束縛を脱して、各自の「まこと」を打出さうではないか――斯ういふ氣持が即ち「自由」といふ心なのである。それでこそ「自由」といふことに道義としての意義があるのだ。自由とは、たゞ氣儘、勝手、我儘といふことでは斷じてない、歪められたる「まことを正す」といふ意義に於ての「自由」でなければならない。第三に、「まこと」はとかく世間的の習俗の下に壓倒されがちなものであるから、之を正しく伸長せしめる爲には、意力がなければならない。こゝに「自由」といふことの行動性が要求せられる、即ち「まこと」とは「まこと」を貫くといふ心なのである。依て、自由の心を奉ずるからには其心はしぜんと、「まこと」としての自由を抑へるものを排除するといふ運動となつて現はれざるを得ない。これが我等の云ふ自由主義である。當今、自由主義とは右したいものは右へ左したいものは左へ行くのが自由主義であるかの如く一般に解せられてゐるやうだが、自由主義とは決してそんなノラリクラリとしたものではなく、正しく「まこと」の心を護るといふ信念に從つて勇敢に挺身することなのである。「千萬人と雖も我行かん」といふ心意氣こそ、「自由」の旗印たるべきものである。

之を俳句に移して云へば、己が「まこと」と思つて書いた言葉が果して「まこと」の底を突いてゐるかどうかを嚴しく内省すべきものだ、其場合在來の575定型を以てしては其の掘り下げ力が掘り切れない、其際、俳句としては是が限度だとして滿足してしまふか、或は其舊式な道具を新式な道具と取り換へて掘り試むるか、こゝに問題がある。俳句は「俳句的」を以て滿足するといふのが定型式だ、何處までも「まこと」の爲に新しい道具を選まうといふのが自由律なのである。又、575の定型には、傳統的な一種の魅力がある爲に、己が思ふところの「まこと」を表現しようとすゝ其言葉が、いつとなく575的になめらかに、甘く撓められ、且つなよやかに美しく姿づけられてしまふ。これは生花に於て、枝をためる如く「まこと」の歪曲である。それは、いかに姿として美しくとも、自然の「まこと」の姿ではない、これを自然のままに表現する方が本當だとする、即ち其の歪みを正すといふ氣持を以て表現することが、自由律なのである。次に、定型俳句といふものは、俳壇として多數の集團をもち、一種の娯樂的ふんゐ氣をかもしてゐる、かやうな定型俳壇の中に育つた人は、たとへ定型には「うそ」が多いといふことに氣がついても、敢然として此のサアクルから身を挺して脱出することは餘程難かしい。だが、眞に「まこと」を貫くといふ氣慨を感ずるならば、因襲、傳統、安易、愉樂、情誼といふやうな羈絆を振りはなして、己れの信ずる「まこと」の道に進出すべきであらう。これが自由律俳句の自由主義なのである。

ポツダム宣言に從つて、日本は、自由主義の國になることとなつた。結構なことである。だが、日本人一般は、「自由主義」とはどういふことか。此の棚から落ちて來たやうな「自由」をどう使ふべきか。それも一からに知らない有樣である。自由とは自分の氣ままの勝手や、放埒奔放といふこととは斷じてちがふ。自由とはノンキに、ふやけた氣持になることとは違ふ。其と正反對だ。自由とは「まこと」を求めて止まない心である。人間の中に神を見ようとする心である。きはめてきびしい心なのである。此の意味に於て、日本は新しく敎育されなくてはならない、根本から啓蒙されなくてはならない。そうしてこそ、眞に淨められたる新生日本として復活することが出來るのである。

層雲創刊以來のわれ〳〵の俳句運動は、右の氣持を俳句といふものゝ上にうつしたものである。層雲の俳句は、我々の心に「まこと」を求めてやまない、平常の心の中に神を見ようとする、きびしい行き方なのである。

今日、自由主義の時代となつた。層雲の俳句が自由律として大手をふつて立つ時代となつた。これは喜ばしい。だが、喜ばしいと云つて、徒にうれしがつて、安心してゐる時では斷じてない。今こそ、層雲の主張を、世間の人の心にしつかりと植ゑなければならない。これまで「自由」といふ言葉を毛嫌して、たゞ耳をふさぐことをしてゐた人々も、今は其の耳の穴を開くであらう。層雲の運動が大衆の中に實を結ぶのはこれからであらう。思へば、我々は明治四十四年、此の運動をはじめてから、明治、大正、昭和の三代を通じて、まさに三十五年に亘つてゐる。我々は全く荒地の木の根をおこしたり雜草の瘦地を拓いたりして、其を耕してきたのだ。しかも、時代の爲か、我々の非力の爲か、其の業績は甚だ微々たるものだつた。我々は顧みて、惠まれなかつたことを嘆くよりも、寧ろ、我々の努力の足らなかつたことを恥づるものだ。然し、我々は今こそ、精魂を新にして、我が手に唾して、又、鍬を取り上げるのだ。層雲休刊以來、ほとんど二年。此間、諸君には弛緩の生じた方もあらう、だが、此の空白時の休養に依つて、今は新しい元氣を感じてゐる方もあらう。いざ〳〵、共に、我等の土におり立たうではないか。土壤はいま、充分に潤うてゐる。春はいま地面に萠え出ようとしてゐる。大に耕し、大に植蒔き、大に育てようではないか。私は既に齡六十三。靜に身心を養ひたい氣持もあるが、今日はそんな安閑とした時代ではない。戰敗れた後の日本、いかにせば正しく新しく立上れるかといふ、危急の機に直面してゐる日本の一國民として誰しも、生命のあるかぎりは、其の職分の爲に盡さねばならぬ時だと信ずる。「まこと」の國日本、「自由」の國日本を確立する爲に——此の心を日本の大衆に根づけさせる爲に、「まこと」の道としての俳句、自由の道の象徵としての層雲俳句を宣揚する爲に、私は老骨を粉碎して惜しまない覺悟である。

——一九四六年二月十一日——

春雪旅情

荻原井泉水

○尾張内海にて橋本健三に迎へらる

浪は小松の淡雪、浪は遠くより寄せひろがり（三月七日）

ふぶくとても春の雪の渚をからすのあるく

海には伊勢の山と見えしばらくは吹雪やみてをり

海よりだん〳〵の屋根も菜ばたけも雪

雪の日は潮入川の橋の上手にも船

窓は高みにも菜畑そのまへ枯木二本と四本雪の風景

淡雪つけしキスの魚などと油の煮ゆる音の厨（三月八日）

○伊勢北小松に故小松途從の家を訪ふ

星は、雪がひたへにちら〳〵すると隠れてゐる

道は、雪の川をはなれてよりの夜ふかくなる

雪ふか〳〵と門の、小門は押すに開き（三月八日）

泊められて明けて雪のつばき

堤の雪と雪晴の鈴鹿と送られつ返り見つ（三月九日）

○美濃大江村輪中荘（水谷青史方）にて病む

藪に梅の花また行くと藪に雪ちら〳〵す

多度山かけてふる雪のつくばへの杓

けふも雪の、けさはうぐひす泊り居て

淡雪はれしと聞く藥のひまの薄茶一ぷく

鋸の音ずいこ〳〵淡雪日のさしてきたらしく

淡雪けさは晴れて出て大江村塾の主と（昭和廿一年三月十一日）

麗日壇

井泉水選

おのおの月に影持ちて先生を訪ねる　大麓晉亦紅

雪おのれ喰ふものつけて馬のひかるる　秋山秋紅蘭

米とぎ場の二三羽は雀きてをつて　財馬柯歩

馬橇の鈴の今年も聞けるころとなりてあけくれ
しらじらと日のてる羽後の稲田刈田のおもて
栗の木ばやしの落葉からからはれてゐて伯父へ通る
めがねをあげて新聞おろして遠山雪の見ゆ
旅へ結飯のおもてうら三つやき終へるのを待つ
荷物振り分けて肩にすると山は晴れてゐる冬の雪
山が雪を着て正月の子供着ぶくれ
竹やぶかぜのない冬の日なり
歩いていよいよ山の夜の冬の水おとです
用足しに辨當持つて冬の晴れきつた山々
ここにふきのと青々と山から出ても山の中
追はれるやうな都會から山に住み木の葉がふる
うしろ姿亡き娘のままの刈田の道一すじ
納屋へ出入りする鶏の見えたりして師走ぬくとし
昨日の雪に今朝の陽のさして麥の芽

鎌倉日記（一）

井泉水

立春大吉――まことに此の感銘の感じ
のまゝなる好い朝。水色に澄んだ空には雲
一つ無くて、いかにも今日から春である。
「立春大吉」と大書した紙牌を門口に貼る
習俗は、或る地方には、殊にお寺には今日
でも殘つてゐるであらう。多くは木版刷の
ものだが、墨で書いたらば面白いであら
う。そんなことを考へ、ふと興が湧いたの
で、詩箋に此の四字を書いてみた。墨のか
ぎり、二十枚ばかり書いた。それを先輩や
知友に送つてあげた。先輩といへば、大學
で親しく教を受けた先生にして存命してを
られる方は、新村出、金澤庄三郎の兩博士
だけになつた。淋しくもあれば懷しくもあ
る。平生は手紙をあげるやうな何の用件も
ないが、せめて一年に一度は、教を受けた
恩を私も其の禮儀だけは盡したいものだ。

×

或る書店から依頼されて、隨筆集の原稿
を整理した。此の四五年、さつぱり出版の

鮪をたべてしまうて鮪一つびきつが鳴りして陽のある障子の中のひとときなはいのちありて今年の首巻まいて出る

刈田に陽のあまねし女の兒男の兒繩飛び

日冷えるまつすぐあなたの家にゆく

山が日を出す火燵にて二人

家が雪つけてをる木をもつ

山から照る朝の日の陶窯が雪の中

雪にわが足跡見送られてをる

らんぷ、訪ねて遠い海の話なども

淺間の山を壁の向ふ、ランプ吊して

島山元日の床凡に火はあつて一ぷくする

オリーブ園の青い葉は夕日、海も正月

生きて歸つた話も船の中でうめのはな生けてある

廊のうち紅葉そとも紅葉の朝まゐりする

田ン圃に麥が生え學生ドストフイエフスキイを持ち

たにしの田樂も相撲場のむしろが多日

夕月冬になつた田の畔のくらくて戻り

家が水田に横向いて雪のふりやんでゐる

抱くやうに風呂の道具を女晩が小雪になる

寐るころのもういい雪になつてゐて松の葉まだ降る

消えない雪が藏の前毎晩明るい月夜になる

蒲けばつらら昨日の風呂だが入れといふ

かくして今年が終るラヂオの中の拍手

雪に値が出て青空けふ風呂屋に風呂があつて人が鋤る

近木黎々火

井上一二

池原魚眠洞

機會がなかつたので、隙樂は澤山に溜つてゐた。二冊になつた。一冊の題は「鮎」とした。鮎といふ魚は、大好きなものだからだ。一冊の題は「柿と桃」とした。これも大好きなものだからだ。「鮎」が鮎の季節に出來、「柿と桃」が柿の頃までに出來てくれたらいゝが……。

×

後二、信州へ行く。寒からうとおもふが、雪の中を歩くのは愉快です、などと云うて出かけた。若い者の元氣はいゝ。尤も、豐尻の松雨亭で、火燵の中で、丁度、舊正月の餅を味ふのも樂しいであらう。

（二月四日）

×

このごろ、話題の第一は天皇制是非だが、ともかく斯うしたことが遠慮なく口にすることの出來る世の中となつたことが朗かではないかと思ふ。天皇はわれ〳〵日本人の宗家として、日本の國の存するかぎり尊敬せられよう。それは感情に過ぎぬといふ理論も一理はあるが、感情の眞實といふことも亦たしかに眞實である。たゞ、一國の政治といふものと、感情とを混淆しないやうな、新しい制度にすることは必要だ。天皇

秋をふり二葉にふり暮れかけてふる　　瘤英之助

どちらを見ても凶作の一驛一驛停り鵙の鳴くさへ

まだ一里はあつて蝗徑に出てゐるやうな日和みちしるべ　　淨心寺惇

朝をすこし薪に挽く壹をすこし薪に割るそんな短日

旅の句をはたけの句をさうした秋の雨の日もよし　　高橋良太郎

炭を背負つてゆつくりゆつくり暮れてゆく山

柳に雪まじりの雨がふる黒人ばかりの慰安所　　小谷信夫

煙草のかんばんに梅の枝がにゆうッと早春

彈丸入の箱米櫃に買つて年つまつてゐる　　原農平

燒け出されて來てゐて青木の實のあかくなる

枇杷の花いつまでもさいてみづゆきのふる　　井上充夫

雪に杉の葉のおち杉の雨しづく

水へけもののあしあとも雪景色としての火燵（宇奈月）

蓋とれば風呂吹のほけ

鶏が來て橋も日ぐれの中之島わたり雪になる

道も、霜深い畑へ戸をあけて山も明けてくる

雨のふる毎に枯木のぬくとい雨が藏の白壁

夕方の多雲光り電信所もう灯をつけてゐる

あちら養鶏場枯れた桐の木畠道がとほる

師走の日が落ちかかり押せばあく郵便局の扉

青葱が少々冬至の近い土に生けとく

晉が鼠が鼠とりの網雪が雨になつてゐる

鰯にちらつく雪もみかんにさす日もべらぼうなねだん

時の帝の御ことなどうす雪きて山々まちにきらめく

しんじつ炭が火になるそば妻の手が、何年になる

は富士山のやうなもので、科學的には一種火山に過ぎないが、其の秀麗は仰いで、日本の象徴とするに足りるといふ武藤貞一氏の說はいゝ。天皇を廢して大統領制にしたならば、暗殺につぐに暗殺が行はれよう、といふ賀川豐彦氏の考もうなづかれる。

散髮に出かけた。寒の內は、寒さにかまけて頭髮蓬々となり、家內から「部隊長」などと笑はれるので出掛けた。道端の梅、十日ばかり通つて見ないうちに、蕾がすつかり柔らいでゐた。アメリカ兵が三々五々、手をふつて通る。探梅といふ風流でもあるまいが、ジイプで埃を立てゝ通るのとは違つて、これも春らしい。

×

床屋で、扉を明けてはいると、いらつしやいと云つた。これは珍らしかつた。戰爭中、凡ての店が無愛相になり、客を客とも思はぬ態度だつたが、このごろは人手も殖え、改正賃金もきまつたからだらう。とにかく、いらつしやいの一言に春蘇るの感。

（二月五日）

×

ラヂオで林語堂の「私は何を欲するか」（朗讀）を聞く。林語堂は世界中で、私の